様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：３４５１７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ０２６０２

研究課題名（和文）幼児の共感的相互作用を高める身体表現遊びの指導法

研究課題名（英文）Physical Expression Teaching Methods to Enhance Empathetic Interactions with Children

研究代表者
遠藤　晶（ENDO, Aki）

武庫川女子大学・教育学部・教授

研究者番号：３０３５３００６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、指導経験のある保育者の気づきと対応の具体的な方法を学ぶことで、若手保育者が指導力を向上させることができるかを確認することである。そのために、（１）身体表現遊びの指導中における保育者の視線を記録する方法を開発、（２）幼児の身体表現の指導における保育者の気づきと対応の検討、（３）保育学生と指導経験者の視点の違いを検討、を行った。その結果、保育者は、身体表現遊びの際に幼児の身体の動きや表情に注目し幼児の思いや幼児同士の関わりをよく見て気づこうとしていること，その後の遊びへ発展や変化を期待し一人の表現が周りの幼児たちの表現にも波及することを予想して関わっていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
今回の研究では実際にどこを見て何に気づくことが大事なのか、そしてどのように対応するのがよいか、身体表現の遊びに求められる保育者の気づきを可視化する。身体表現遊びの具体的な指導法の研究という点から本研究は非常に大きな意義がある。幼児理解・対応についての具体的記録は、幼児の身体表現活動の指導において保育者として幼児の遊び理解のポイントや保育者としての指導の内容を動画再生によって学べる保育学生向けの保育指導の教材の研究にも関連し、保育者養成においても重要な研究になる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to confirm whether young kindergarten teachers can improve their teaching skills by learning specific “awareness and response” techniques from their experienced counterparts.This was achieved by:(1) Developing a method of recording the teacher's gaze during physical expression teaching (2) Examining the “awareness and response” of the teachers while teaching physical expression (3) Examining the differences between the perspectives of the student teachers and their experienced counterparts
It was found that the teachers paid attention to the bodily movements and facial expressions of the children during physical expression, striving to notice their feelings and their interactions with other children, and that they anticipated development and change in subsequent relevant play and expected one child's expression to influence those of the other children.

研究分野：子ども学および保育学関連

キーワード：幼児　共感的相互作用　身体表現遊び　指導法　「気づき」と「対応」

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

H30 年度から施行されている幼稚園教育要領、保育所保育指針、認定こども園教育・保育要領では、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿が示された。幼児の豊かな感性と表現の育ちに関しては、「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。」ことを目指している。

幼児が友達同士で表現する過程を楽しみ、表現する喜びを感じる経験をするには、幼児同士の多様な身体表現をよく見て絶妙なタイミングで言葉がけをすることや、幼児が動きたくなる雰囲気を醸し出し友達同士で楽しめる展開をするなど、保育者の「気づき」と「対応力」つまり質の高い指導力が求められる。しかし、その具体的指導方法については明らかにされていない。

身体表現遊びの指導経験のある保育者の具体的な指導方法が明らかになれば、その方法を学ぶことによって若手保育者も身体表現遊びの指導力を身に付けることができ、質の高い保育者育成に貢献できると考えた。

２．研究の目的

本研究ではウエアラブルアイカメラを用いて身体表現遊びの指導中における保育者の視線を記録する方法を開発し、指導経験のある保育者の気づきと対応の具体的な方法を明らかにし、身体表現遊びを楽しく指導できる保育者と若手保育者の気づきの違いを示し、指導経験のある保育者の気づきと対応の具体的な方法を学ぶことで、若手保育者が指導力を向上させることができるかを確認することが目的である。

３．研究の方法

（１）身体表現遊びの指導中における保育者の視線を記録する方法を開発する
（２）幼児の身体表現の指導における保育者の気づきと対応を検討する
（３）保育学生と指導経験者の視点の違いを検討する
（４）幼児の共感的相互作用を高める保育者の気づきと対応を検討する

４．研究成果

（１）身体表現遊びの指導中における保育者の視線を記録する方法

①目的　子どもの身体表現遊びにおける保育者の気づきを記録する方法を検討し、保育者の気づきの観点を検討する。

②方法　Tobii Pro グラス 2　50（トビー・テクノロジー株式会社）（以下ウエアラブルアイカメラ）を用いて保育中の保育者の視線記録が可能か検討する。

③結果および考察

本機利用することで、被験者の視界に入る情報に対して注視対象の視線記録が可能であり、同時に搭載マイクによって音声も記録可能であった。保育者が装着することで保育中の保育者の視線記録を収集する研究が可能となることを確認できた。

（２）幼児の身体表現の指導における保育者の気づきと対応の検討

①目的　身体表現遊びの具体的場面における保育者の指導について、ウエアラブルアイカメラを装着した保育者の視線行動記録をおこない、保育者の気づきと対応について可視化を試みる。

②方法

1）研究協力者：兵庫県 A 市公立幼稚園　5 歳児（男児 9 名、女児 7 名、計 16 名）、4 歳児（男児 16 名、女児 12 名、計 28 名）と保育者（幼稚園教諭として 10 年目）に調査の同意を得た。協力園ではリズム表現は日常的に保育で取り組まれており、日常の保育の中でも幼児が自発的に表現することを大切にしている。

2）調査対象となる保育の概要：調査は 9 月末に運動会を前に絵本を題材にした身体の表現を楽しむ遊戯室でのリズム遊びの時間に行った。4 歳児、5 歳児合同で担当保育者の問いかけに対して、子どもたちと保育者の身体の動きや言葉で応答する形で約 30 分の遊びが進められた。他のクラスの保育者も補助的に関わり、担当保育者が、即興的なピアノ伴奏で言葉をかけるという方法で進められた。保育のねらいは「二学期、運動会の取り組みを通して、一人一人が自信をもって自分の力を出し切る心地よさを味あわせたい。自分の思いをしつかり伝えあい、時にはぶつかり合う経験もしながら友達のことをしっかりみんなが分かりあい、お互いのことを認め合い、支え合える仲間作りをしていけるよう支えていきたい。リズム表現『はらぺこあおむし』を通して、自分の思いを伸び伸びと表現する心地よさを感じ、みんなで一つの話で遊ぶ楽しさを味わってほしい。また、自然や生き物への興味関心がより育まれ、命の尊さを感じられるようにしたい」との願いをもって設定された。運動会までの、リズム表現『はらぺこあおむし』（エリック・カール作／絵　もりひさし訳）では、・いろいろな食べ物を探すことに心躍らせる元気なあおむしになって伸び伸びと表現することを楽しむ。・あおむしになったり食べ物を表現したりして年長とかかわって遊ぶことを楽しむ。・友達や年長児の表現を見て刺激を受けたり、相手のよさに気

付いたりして共に遊ぶ楽しさを味わう。・リズムに合わせて体を動かす楽しさを味わう。ことがねらいとして設定された。
3）気づきの記録方法：担当保育者には、保育中にウエアラブルアイカメラを装着してもらった。調査当日に保育者ウエアラブルアイカメラを装着していることに子どもたちが違和感をも持たないよう、事前にめがね遊びを取り入れ自然な形で調査ができるようにした。
4）分析方法：遊びの記録から、大きく成長したはらぺこあおむしの導入場面 60 秒間と、導入開始から約 11 分が経過したおなかが痛くなるはらぺこあおむしの発展場面 60 秒間を切り取りそれぞれ、【導入】と【発展】として保育者の発言を時系列にスクリプト化した。ウエアラブルアイカメラのリプレイ機能により示される赤い丸印を手掛かりに【導入】と【発展】それぞれの場面で保育者が何をどう見ているのかについて注視対象を評定した。注視対象を評定は、動画ソフトを活用して 1 秒間 30 コマの静止画面で再生し、「顔・手・身体（胴体）・足・その他・記録なし」注視対象について【導入】【発展】各 1800 画面を評定した。
③結果および考察
　遊びの内容は計画に基づきながら、子どもたちの発想やイメージしたことを大切にしながら遊びが進められた。注視対象記録より、赤い丸印がついた【導入】1428（導入 1800 画面の 79.3%に相当）、【発展】1571（87.3%）の画面について、顔・手・身体（胴体）・足、その他、のどの部分に赤い丸印がついているか割合を図 1 に示した。注視対象は、【導入】では身体 28.8%、手 25.9%、足 17.2%、顔 9.3%、その他 18.8%、【発展】ではその他 31.8%、身体 31.6%、足 14.4%、顔 11.7%、手 10.5%となり、導入時は、動き始める手の動きに注目しているのに対して、発展時は微細な動きより身体全体や表情に注目していることが示された。

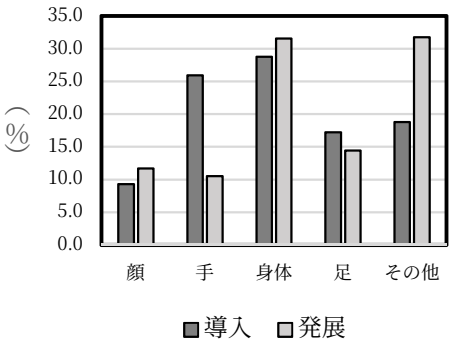


図 1　注視対象の割合

　表現遊びにおける保育者の気づきと対応事例を示す。
【導入例①】「あおむしさんどんな小ささだったの」の保育者の問いかけに、子どもが小ささやりんごの形を身体や手・指を使って表現し保育者に示した場面では、子どもの手や身体の微細な動きに注目し、「ああそうそう。そうだったねー、そうそう。」という発想を認めながら、「はらぺこあおむしごっこ」に参加する意欲を確認している。
【導入例②】「なにを探しに行ったのかな」の問いかけ、立ち上がってりんごを表現している子どもを見て、「ほんま。ちょっとこのりんご、みてみて。すっごい大きいよ」と他児にも気づかせるような言葉をかけ、相互作用を促す言葉をかけている。
【発展例①】「みんなあおむしさんだよ。お腹いっぱいだー。」と、子どもがイメージできるような言葉をかけて心ウキウキする伴奏の仕方で場面展開をしている。「どのたべものさがしにいこうかなー」と動きを促し、子どもたちのあおむしの動きに合わせた伴奏をしながら、集団の中で子どもが自分なりの表現を楽しんでいるか、創造的な動きをしているかを確認している。
【発展例②】保育者がピアノを離れて「たいへん。ちょっと聞いてみよう。どうしたの？」と子どもに問いかけると、子どもはおなかが痛くなる表現や、「おなかいたいよー」と保育者の顔を見て応えている。表現する子ども一人一人の様子を見て、子どもに近づいたり、なりきっている子どもの身体にふれて気持ちを確かめようとしたりしている。表現していることを保育者に認めてもらえてうれしい表情を保育者に向ける子どもの様子も確認し、子どもたちが表現していることを認めていた。
　調査直後、担当保育者に気づいたこと、感じたことなどのインタビューでは、
・自分の意思の中では、遠くで何かこう自分の気持ちを少しでも表そうとしている子とか、そういう子たちに自信をつけさせてあげたいなと思っていた。
・お腹の痛がりぶりっていうのをそれぞれやっていたと思うんですけど、その中でも自分が持っているイメージと子どもがやっている痛がりぶりや自分なりに表現している子はいるかなーってすごく探していました、など、保育の計画を十分考えた上で子どもを意図的に見ようとしていたこと、子どもの表現に対してよく見て一人一人応答的な関わりをしようとしていたことが語られた。
④まとめ
　保育者は保育を進めながら、子どもの微細な手の動きや・身体・足・顔の表情から子どもの発想や興味についての情報を読み取り、
・「はらぺこあおむしごっこ」に参加する意欲を確認する、
・他児との相互作用を促す、
・集団の中で子どもが自分なりの表現や、創造的な動きを確認する、
・表現する子ども一人一人の様子を見て子どもの気持ちを確かめるなど、子どもの様子を見ながら瞬時に対応をしていることが示唆された。

（３）保育学生と指導経験者の視点の違いの検討

①目的　身体表現の遊びの動画視聴による実験調査場面でのウエアラブルアイカメラによる注視対象の視線記録を用いて身体表現遊びのなかで保育者と子どもの共感的相互作用が高まる遊びを見る視点が保育学生と指導経験者で違いがあるか比較検討をする。

②方法

1）研究協力者：「指導経験者」（E 群）：大学等で身体表現の遊びの指導経験があり、幼児の身体表現についての研究・実践者でもある 5 名。「保育学生」（Y 群）：保育者を目指し保育所・幼稚園等で実習等での身体表現遊び指導を経験し幼児を対象とした身体表現の保育実践について継続的に研究している大学 4 年生 5 名を対象とした。

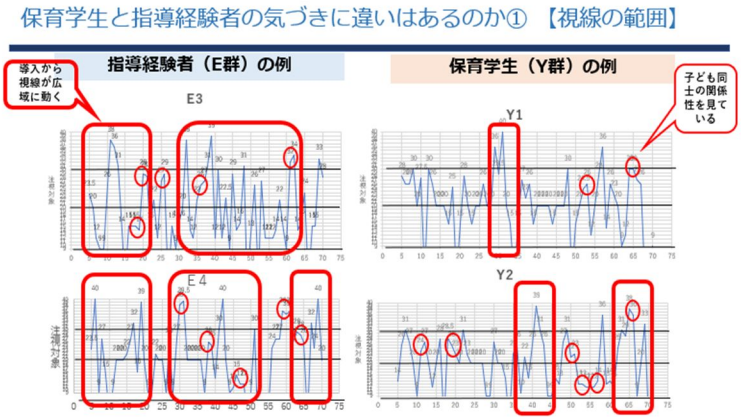
2）保育者の気づきの記録：幼児の身体表現遊びの観察記録の動画をモニターで見て「気づき」の記録を行った。被験者がウエアラブルアイカメラを装着し、幼児の身体表現遊びの観察記録の動画をモニターで見て被験者の視線マークを記録した。使用する身体表現の観察記録の動画は、過去に撮影した幼児の身体表現の研究資料を用いた。視聴後、画面を見ながら感じたことなどを語ってもらい録音した。幼児の身体表現遊びの動画は、大阪府 S 幼稚園４歳児年中クラス（25 名）で行った表現あそびの記録動画を用いた。

3）注視対象の評定と記録：被験者のリプレイ記録を１秒間ごとの静止画面で再生し、導入から遊びの発展までの 60 秒間の視点対象を記録した。評点には、幼児の身体表現の研究者である 2 名が同時に映像を再生し視線対象者を照合した。評定の意見が分かれた時には話し合ったうえで確定した。

4）遊びの内容に着目した分析：遊びの導入からおいもの表現が始まる約１分間のうち、Ⅰ（T が話をしてイメージを伝えている導入場面）、Ⅱ（子どもたちがイメージした表現を T が受け止めて返している場面）、Ⅲ（子ども思い思いに表現を楽しんでいる場面）の３区分の視点対象を比較した。

③結果および考察

表現遊びで共感的相互作用が高まるためには、保育者が幼児の淡い思いに気づいて共感的に受け止めその思いや表現を「価値あるもの」として捉え、幼児同士の共感的相互作用が高まる遊びを幼児と共に作り上げることが必要であるが、「指導経験者」は俯瞰的に保育者と子どもの相互のやり取りを見ようとするために、バランスのとれた見方をする可能性が示された。



（４）まとめ

幼児が感じたこと考えたことや自分のイメージを動きで表現する喜びを感じて、相互の関わりを豊かにする身体表現遊びを経験するには、どのような保育者の気づきと対応が必要かを検討することを目的として、まず、幼児教育における身体表現遊びの指導に関する研究から課題を示し、身体表現遊びを指導中の保育者の視線記録と言語データを得るための調査方法を説明し、その方法によって共感的相互作用を高める保育者の気づきと対応についての事例を分析した。

保育者は身体表現遊びの際に幼児の身体の動きや表情に注目し幼児の思いや幼児同士の関わりをよく見て気づこうとしていること、その後の遊びへ発展や変化を期待し一人の表現が周りの幼児たちの表現にも波及することを予想して関わっていることが分析データにより明らかになった。保育者が幼児の淡い思いに気づいて共感的に受け止め、その思いや表現を「価値あるもの」として捉え、幼児同士の共感的相互作用が高まる遊びを幼児と共に作り上げることが、幼児の豊かな感性と表現を育てる身体表現遊びの体験に繋がることが示唆された。

本研究を通して、身体表現遊びのなかで幼児の表現に気づいてその思いを大切にして指導する質の高い指導力について可視化することができた。保育の意図やねらいをもつことは必須であるが、一人一人の幼児の思いを受け止め、次はどのような遊びになるかと予想し期待すること、幼児の思いを大切にして時には提案していくことなど、瞬時の気づきや対応が必要である。そのことが保育者としての専門性が問われる点である。幼児の豊かな感性と表現を育てるために、保育に必要な基礎的な技能・温かさ・共感性など保育者としての資質を持ち合わせること、保育者自身も虫や自然への興味や経験があること、幼児と一緒に遊びを楽しめること、その時々の思いに共感してくれることなど、保育者自身の感性や創造性の豊かさなどの多様な専門性が求められることも改めて示唆された。今後さらに熟練保育者の多様な保育場面を収集し、保育者が注目している子どもとその周辺の子どもとの関係に着目した指導方法や、保育者の共感的相互作用を活用した指導方法の分析を進め若手保育者の身体表現遊びの指導力育成に繋げていきたい。

＜引用文献＞

遠藤　晶（2020）保育者は子どもの身体表現のおもしろさをどのように見るのか,日本保育学会第 73 回大会研究論文集,pp.861-862.
遠藤　晶・久米裕紀子（2021）幼児の身体表現の指導における保育者の気づきと対応①～ウエアラブルアイカメラによる気づきの検討～,日本保育学会第 74 回大会研究論文集, pp.83-84.
久米裕紀子・遠藤　晶（2021）幼児の身体表現の指導における保育者の気づきと対応②～遊びこむ姿を読み取る保育者の援助に着目して～,日本保育学会第 74 回大会研究論文集, pp.85-86.
遠藤　晶・久米裕紀子（2022）幼児の身体表現の指導における保育者の気づき～ウエアラブルアイカメラによる保育学生と指導経験者の視点分析を通して～,日本発達心理学会第 33 回大会発表論文集 p.162.
遠藤　晶・久米裕紀子・高橋弘美・酒井真理枝（2022）幼児の共感的相互作用を高める保育者の気づきと対応～ウェアラブルアイカメラによる記録分析を通して～,武庫川女子大学大学院,『教育学研究論集』17. pp.7-14.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 遠藤晶・岡澤哲子・ 直原信子・魚住美智子・小西智咲子・ 渕田陽子・ 松山由美子・ 森末沙織・ 柳田紀美子
２．発表標題 保育現場における日常の身体表現遊びの実践と課題
３．学会等名 日本保育学会第72回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 遠藤　晶
２．発表標題 保育者は子どもの身体表現のおもしろさをどのように見るのか
３．学会等名 日本保育学会第73回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 遠藤　晶・久米裕紀子
２．発表標題 幼児の身体表現の指導における保育者の気づきと対応①～ウエアラブルアイカメラによる気づきの検討～
３．学会等名 日本保育学会第74回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 遠藤　晶・久米裕紀子
２．発表標題 幼児の身体表現の指導における保育者の気づきと対応②～遊びこむ姿を読み取る保育者の援助に着目して～
３．学会等名 日本保育学会第74回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 遠藤　晶・久米裕紀子
２．発表標題 幼児の身体表現の指導における保育者の気づき～ウエアラブルアイカメラによる保育学生と指導経験者の視点分析を通して～
３．学会等名 日本発達心理学会第33回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 遠藤　晶・久米裕紀子・高橋弘美・酒井真理枝
２．発表標題 幼児の共感的相互作用を高める保育者の気づきと対応～ウェアラブルアイカメラによる記録分析を通して～
３．学会等名 武庫川女子大学大学院,『教育学研究論集』17．pp.7-14
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	久米　裕紀子 (KUME Yukiko) (60779205)	武庫川女子大学短期大学部・幼児教育学科・准教授 (44523)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関